

休日はよく歩くよう
になった=仙台市

難病

不安と決断①

異常、4年前からあったが

約1年前にもピンクの尿が出て驚いたが、まもなく治った。今度も水分をたくさんとるところは大丈夫」と言っていた。

約1年前にもピンクの尿が出て驚いたが、まもなく治った。今度も水分をたくさんとるところは大丈夫」と言っていた。

月曜日はいつものように出勤した。

ところが、上司に「顔色が悪いから、早退して医者に行け」と言われた。

自宅に保険証を取りに帰つたついでに、数年分の検査結果も持つて、昼休みも診察していった仙台内科総合クリニックに飛び込んだ。血压を測ると、高めだった。唐沢さんからこれまでの経過を聞いた鎌田和彦院長は「IgA腎症かもしれません」と言った。

腎臓内で血液を濾過する糸球体に、本来は外敵から体を守る働きをする免疫グロブリン「IgA」というたんぱくが沈着し、糸球体の毛細血管に炎症が起きる病気だった。慢性腎炎の一つで、進行すると腎不全になる。

まず血液検査をして、IgAの値が高いかどうかを調べることになった。「結果が出る3日後にまた来てください」と言われた。

家庭用の医学書などで病名を目にしたことがあった。けれど、総合病院で大丈夫と言わっていたので、「まさか」と思った。

翌日、いつも検査を受けている総合病院も行った。尿中にまたたんぱくが検出されたが、「来月、もう一度調べますが、とりあえず、心配ありませんよ」と言われた。

ほっとした半面、いったいどうちなのだろう、と不安になった。

(本多昭彦)

仙台市の唐沢洋子さん(50)＝仮名＝は07年6月中旬の金曜日、久しぶりに会った友人と夕食を楽しんでいた。だが、急に寒気がして、トイレで食べたものを戻してしまった。

「風邪かしら」

前年の夏に派遣社員から正社員になり、仕事が複雑になって、量も増えた。朝8時から夜8時まで昼休みもとれないような忙しさが続き、ずっと疲れが抜けない気がしていた。その日は帰宅してすぐに寝たが、翌朝、ウーロン茶のような真っ黒な血尿が出た。

4年ほど前から、勤務先の健診の尿検査で潜血反応の陽性が続き、気になつて、総合病院の泌尿器科に行って腎臓の造影や超音波などの検査を半年ごとに受けていた。

しかし、結果はいつも「問題なし」。最近受けた検査では尿たんぱくも検出され、7月に再検査することになつていていたが、「今

の検査を半年ごとに受けているが、「今のところは大丈夫」と言っていた。

ようになつたら、日曜日には血尿は出なくなつた。「来月、また検査に行くからいいか」月曜日はいつものように出勤した。

ところが、上司に「顔色が悪いから、早退して医者に行け」と言われた。

自宅に保険証を取りに帰つたついでに、数

■ご意見・体験は、〈メール〉 iryo-k@asahi.comへ。

「患者を生きる 不安と決断」は5回連載します。



ウーロン茶のような血尿が出た仙台市の唐沢洋子さん(50)。仮名は07年6月、仙台内科総合クリニックで、「IgA腎症かもしれない」と言われ、血液検査を受けた。

3日後、検査結果を聞きに行つた。

免疫グロブリンのIgAの値が高かつた。

「IgA腎症だと、いずれ透析が必要になる可能性があります」と鎌田和彦院長は説明した。ただし、確定診断には、入院して腎臓の組織の一部を採取して調べる「腎生検」をする必要があるという。

当時、長男は専門学校生、次男は大学受験を控えた高校3年生だった。

「血尿も止まったし、ほかに自覚症状はないのに入院は……」。仕事や子どもたちのことを考えると、決心できなかつた。

数年前から尿潜血は陽性だったが、総合病院で大丈夫だと言われていたので、「きっと違うだろう」という思いもあつた。

血圧が高めなので、降圧剤をもらいに毎週クリニックに通つたが返事をしないままだつた。けれど、勤務先の友人に相談すると、「ちゃんと受け取った方がいいよ」と言わ

れて、思い直した。

「夏休みがとれる時期なら」と鎌田院長に病院の紹介を頼んだ。ただ、このときも「念のために」という気持ちだった。

7月中旬、仙台社会保険病院を訪ねた。

生検をしないと確定できないが、慢性腎炎で、IgA腎症の可能性が高い、と診断された。さらに、「少しずつ進行していく、このままだと5年後には腎不全になつて、透析ですよ」と木村朋由医長に言われた。

唐沢さんは言葉を失つた。

「もう迷つていられない」。その場で8月1日に入院することを決めて帰つた。後日、勤務先に提出するため診断書をもらいに行つた。しかし、だれの診察を受けたかも覚えていないほど動転していたことに気づいた。

入院して3日目に腎生検を受けた。

その後、やはりIgA腎症だったと、病院のベッドで木村医長から告げられた。

「詳しい説明は明日します」。IgA腎症に対して仙台社会保険病院で行つている治療に関する新聞や雑誌の記事のコピーを渡された。「根治を目指した治療法」と書かれていたが、「インターネットで調べたときは、治らない病気と書かれていたはず」と思った。その夜は不安で眠れなかつた。

難病

不安と決断②

念のための検査のつもりが



薬を飲んだことを袋に記録した=仙台市

■ご意見・体験は、〈メール〉 iryo-k@asahi.comへ。

仙台市の唐沢洋子さん(50)は07年8月、仙台社会保険病院に入院して腎生検を受けた結果、慢性腎炎の一つ、IgA腎症と診断された。

引き続き入院して、治療することになった。木村朋由医長から説明を受けた。

IgA腎症は、腎臓の糸球体という部分にIgAという物質が沈着して毛細血管に炎症が起き、尿に血液やたんぱくが漏れ出る病気で、進行すると腎不全になってしまいます。原因は不明で、以前は薬で進行を遅らせるることはできても、治らない病気とされていた。

しかし、仙台社会保険病院では、「扁桃摘出・ステロイドパルス併用療法」という治療法に取り組み、成果をあげていた。

ステロイドの集中的な点滴で糸球体の炎症を抑え込むとともに、IgAを作る指令を出している扁桃を取つて元を絶つ、というもので、同病院腎センターの堀田修・前センター長が88年に始めた方法だった。

パルス療法では3日間連続でステロイドを点滴し、4日間休むことを3回繰り返す。扁桃摘出どちらを先にするかは患者の状態によって違う。唐沢さんの場合、耳鼻科の手術の予約が1ヵ月先までいっぱいです。8月中にパルス療法を2回していったん退院し、9月に再入院して扁桃を取つた後、最後のパルス療法をすることになった。腎臓の炎症が進行していくので、少しでも早く治療をスタートしたほうがよいという判断もあった。

点滴を始めるとき、木村医長が「根治しますよ」と言ってくれ、心強かった。

だが、8月末に家に戻つて、インターネットでの治療法について調べると、「一定の効果を上げているが、国際評価は定まっていない」などと書かれていた。

また、「尿潜血が認められて3年以内に始める」と治る率が高いと説明されたが、唐沢さんは4年前から潜血が続いていた。

「本当に治るのだろうか」耳鼻科で手術について説明を聞くと、怖くなり、さらに不安が膨らんだ。

でも、治療法があると言われば、受けるしか道はなかつた。

9月に扁桃を摘出し、3回目のパルス療法を受け、10月初めに退院した。

退院時の尿検査では、潜血はまだあった。でも唐沢さんは、自分の腎臓がいまどんな状態にあるのか、怖くて聞けなかつた。

難病

不安と決断③

本当に治るのか、怖かった



友人とのメール交換が支えになった=仙台市

IgA腎症の治療のため、仙台社会保険病院で扁桃の摘出手術とステロイドの点滴を受けた仙台市の唐沢洋子さん(50)〔仮名〕は、07年10月上旬に退院した。

退院後は半年ほどステロイドの飲み薬を飲むことになります。潜血の度合いは多少上下しながらも、まだ陽性だった。

「退院後は尿潜血は入院当初より程度は減ったものの、まだ陽性だった。

「退院後は半年ほどステロイドの飲み薬を飲むことになります。潜血の度合いは多少上下しながらも、治つていいですよ」

定期検査が気になる日が続いた。

入院中から担当医師に言われてはいた。しかし、尿潜血がみつかって4年もたつてから治療だった。

職場に復帰すると、同僚たちが「もう大丈夫なの?」と声をかけてくれた。

一方で、「腎臓病って治らないんでしょ」と言う人もいて、落ち込んだ。

そんなとき、入院中に知り合った同じ病気の仲間とのメール交換が励みになった。

隣の病室だった女性とは、検査や薬、仕事のことなどを何度もやりとりした。潜血反応が「十」から「十一」になつた、ステロイド

が1錠減つた……。そんな微妙な違いをわかり合えるのが、うれしかつた。

女性が手術後も血尿が出て不安になり、一足先に退院した唐沢さんにメールしてきたこともあった。「私も直後は尿中の赤血球が増え、その後は減つていつたよ」。携帯に打ち込みながら治療を振り返ることが、気持ちの整理になり、回復への励みになつた。

12月には潜血が消えた。ステロイドも徐々に減つて翌年6月には必要なくなつた。

8月には、木村朋由医長から、尿たんぱくも尿潜血も認められず、症状が安定した「寛解」になつた、と告げられた。仙台内科総合クリニックに通い、2カ月ごとに検査を受けねばいいことになつた。

「これで終わつた」

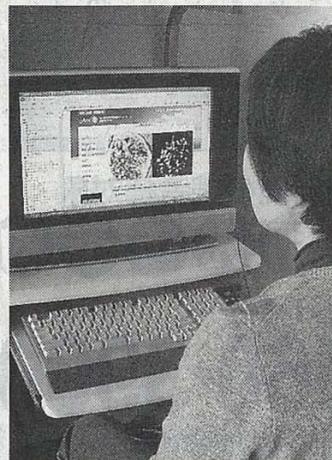
うれしかつたが、再発の不安もあつた。治療開始までの遅れが、ここでも気がかりだつた。「でも、心配ばかりしていても、何も変わらない」。忙しくて、体調を崩した経験から、仕事をかわり、自分のペースができるようになつた。週末はゆっくり過ごす。

夕方、自宅から買い物先まで約30分歩く。「みんな色々な思いを抱えているんだろうな」。それ違う人を見て、そう感じられる自分がいることに気づいた。(本多昭彦)

難病

不安と決断④

仲間とのやりとりが支えに



いまも病気の情報に
目を通す=仙台市

■ご意見・体験は、〈メール〉 iryo-k@asahi.comへ。



IgA腎症 不安と決断⑤情報編 根治めざした治療法も

IgA腎症は、腎臓内の糸球体に免疫グロブリンのIgAが沈着して起きる病気だ。代表的な慢性腎臓病である糸球体腎炎の半数近くを占め、日本人が多い。原因は不明で、難治性疾患の指定を受けている。

初期には自覚症状はなく、健診などで尿中に血液やたんぱくが検出されて見つかる場合が多い。患者の年代は子どもから高齢者まで幅広く、10代と40代にやや多い傾向がある。毎年約1万人が新たにIgA腎症と診断されているという推定もある。

30年ほど前は治療をしなくてもあまり悪化しない病気だと考えられていた。しかし、その後の研究で、2～3割は症状が軽く、自然に治るものがある一方、腎機能が低下して10年後には約2割、20年後には約4割が腎不全に陥ってしまうことがわかつってきた。

治療は、降圧剤などで血圧をコントロールし、病気が進行するにしたがい、塩分やたんぱくの制限などの食事療法と運動の制限、腎機能を保護する薬などが使われる。

だが、これらでは完治は難しかった。

IgA腎症 不安と決断⑤情報編

「患者を生きる不安と決断」で取り上げた扁桃摘出・ステロイドパルス併用療法は、現在はIgA腎症根治治療ネットワーク代表を務める仙台社会保険病院腎センターの堀田修・前センター長が88年、患者の扁桃に白い点のような膿がついていたことに注目して始めた。IgAを作る指令を出す扁桃の摘出とステロイドの点滴を組み合わせた治療だ。これまでに約1500人に治療を実施した堀田さんによると、尿潜血が見つかって3年内に治療を始めれば、8割以上が尿潜血も尿たんぱくも消える「寛解」になり、その状態が長く続き、完治も見込めることがわかつてきた。ただし、潜血確認から7年以上たっていると、寛解率は半分以下になるという。この治療法は、01年に論文が発表されてから、多くの施設で行われている。

木村健一郎・聖マリアンナ大教授（腎臓高血压内科）は、「この治療を受けた場合とそうでない場合を無作為に比較した臨床研究がなく、国際評価は確立されていない」という。厚生労働省の研究班では、ステロイドのパルス療法だけをした場合と比べる臨床研究を進めていて、その結果が注目されている。いずれにしても早期発見が大切で、健診などで尿の異常を指摘されたら、専門医の診察を受けることが重要だ。

（本多昭彦）

■ご意見・体験は、〈メール〉 iryo-k@asahi.comへ。

IgA腎症の主な初期症状

- 尿中に潜血やたんぱくがみつかる（早期は潜血だけのことも多い）
- 風邪をひいたときなどに肉眼でわかる血尿が出る
- 腎機能の低下とともに、疲れやすさ、食欲低下、息切れ、夜間の多尿などもみられる

情報の窓口

- IgA腎症根治治療ネットワーク <http://www.iga.gr.jp>
- 日本腎臓学会 <http://www.jsn.or.jp>
(腎臓病の専門医や診療ガイドラインなど)
The Asahi Shimbun